

子供の文字意識

東京女子高等師範學校
附屬小學校

淺 黃 俊 次 郎

一 幼児教育と文字

幼稚園教育に於て、幼兒に文字を教へる必要があるかないかといふ問題については、かつて幼稚園協會の座談會で話し合つたことがある。この問題について、小學校教育の立場からは、「幼稚園が小學校教育の爲に強ひて、準備して、幼兒に文字を教へ、込む必要はない」。といふのが私の意見である。

子供に文字を知らせるといふことは、如何にも目に見えた知識を與へることになる爲に、如何にも教育したらしく装ふには持つて來いであるところから、文字を教へ込んでさも子供を賢く育てたかの如き淺慕な自負に陥り勝である。が、健全なる幼稚園教育は、そんな輕薄な自負に陥つてはならぬ。私は考へるのである。

けれども、子供によつてはいつかはなしに、自然に、文字を覺えるものゝあるといふことも、これ亦事實である。文字を覺えさせるといふやうな、知的な方面の育て方をなるべく避けようとしても、それでも尙、今日の子供は文字といふものに可なり早くから興味を持ち始め、事實として文字を意識して行きつゝあるのである。然もそれが、誰に教へ込まれたといふこともなしに、幼兒は生活としての自然さのうちに、文字に對する興味と意識とを持つのは事實である。

生活として自然的に文字を覺えることが、今日の子供の生活として自然なものである限りに於ては、之を強ひて差し止める必要の更にないといふことも亦私の持論である。

二 文字の存在意識と興味

幼児は最も始めに如何なる場合に於て文字を意識し、如何なる意識の仕方をするものであるかといふに、家庭の父母兄弟が、文字を書いてゐるのを見てそこに驚異と興味を持つか、または人が文字、文章を讀んでゐるのを見てそこに驚異と興味を持つかに因つて始まるのである。故に、若し子供の身邊近く文字がなく、文字を讀み且つ書く人がなくて、文字の存在に效用に少しの驚異も興味も持つ機會のない子供は、文字を意識することは出来ないのである。また、如何に多くの文字が子供の身邊にあつても、それを讀む人がなく、文字が讀まれることに對する驚異と興味を感じる機會がなければ、やはり文字を意識することは出来ないのである。

故に文化の低い農村地の子供は文字を意識し始めることが遅く、且つ稀薄であり勝ちであるけれども、文字を多く使つて生活する家庭の子供や、都會地の子供は、比較的文字を意識し始めることが早く、且つ意識の程度も高いのである。

今日の都會地の子供は、文字の文化環境に包まれてゐる。書かれてある文字に眼を觸れること多く、文字を讀み、且つ書くことを見る機會も非常に多いのである。そこで一般的に今日の都會地の子供は、四五歳頃から文字の存在を意識し始め、文字に對する興味を持ち始めるのである。

子供の能力——精神發達の如何にもよることではあるが、文字意識の如きは主としてその環境に發源するものである。故に、いつかの座談會で倉橋先生も申されたやうに、今の東京の子供にまつては、文字は一生活環境物になつてゐるのであつて、子供の精神發達が、人が「文字を讀むこと」に對して驚異と興味を持つことが出来る状態にさへあれば、そしてまた、人が「文字を書くこと」に對して驚異と興味を持つことが出来る状態にさへあれば、今の東京の子供などは可なり早く文字を意識し始めるのである。

その文字の読みや書きに對して幼児が驚異を感じるかどうか、または興味を持つかどうかといふことは、子供の能力―精神發達の如何によることではあらうけれども、文字を意識するとか、文字を早く覺えるとかいふことは、子供の能力の如何よりはむしろ環境の如何から來ることであらうと思ふのである。随つて大都市の子供が早くから文字に目ざめ、幼稚園時代に既に多くの文字が讀めるにしても、それが子供の能力の高さ示すものであることは、一概には言はれないのである。文字なきといふものは、もごくさういふ性質のものなのである。

三 最初の文字意識の三つの型

小學校の尋一に入學した兒童の父兄に對して、子供の最初の文字意識の状態を聞きたゞして見るに、私が自分の家の子供の文字意識の状態を觀察した結果ミ略々同様であることを識り得たのである。それによれば、一つの型は『讀む興味型』であり、第二には『書く興味型』があり、第三型として『讀み書き同時型』の三つの型を見ることが出来るのである。

讀む興味型 この讀む興味型といふのは、他人が書いてあるものを讀んでゐる事に驚異ミ興味ミを幼児が感取して、その驚異ミ興味ミから、手當り次第に字を指して『これ、なに?』と聞きたゞす。そして文字を段々に意識して行く型のものである。

幼児にしてみれば、大人達が讀んでゐるもの(文字)が、繪のやうでもありさうでないやうでもある所の「形あるもの」を、「ア」ミ「カ」ミ「メ」ミ「カ」ミ讀むその事自體が、最初まことに驚異であり興味あることに違ひないのである。

幼稚園に入つてゐる子供の中にも、繪本を見ながら文字を指して、先生に『これ、なに?』とその字の讀みを尋ねるものが随分多いことであらうと思ふ。そしてこの讀む興味型の子供は、同じ文字を幾回も幾回も繰返して讀みを尋ねて、或る文字の形に或る音を一致させる修練を積み、文字を讀むことの意識の仕方、文字を修得して行くのである。

書く興味型 書く興味型の子供は、言葉を文字で書き表はすことに驚異を興味を懐くところから、クレヨンや鉛筆を持つて、ミにかく或る自己流の勝手な形を書き、『これは、ア』ミか、『これは、カ』ミか勝手に読んで喜んで居るか、または、ミても大人には解せない形を書いては、『これ、なに？』(何ミ讀むかわかるか？の意)ミいつて得意になつてゐるのである。若し我々がそれに對して、『わからない』ミ云へば、『これはサ』なミいつて聞かせてまた次の出鱈目な形を書く。『それはなに？』ミ子供に尋ねれば、『メ』ミか何ミか言ふのである。この一見まことに出鱈目で不確實な子供の作業に對して、世の父兄は一體さういふ態度を示して來たミであらうか。恐らく馬鹿氣た無智者の戯れ事ミしか觀てゐなかつたのではないかミ思ふのである。

私の家の子供は、長女ミ末子ミが大體この書く興味型の文字意識であつたが、長男ミ次女ミは大體讀む興味型で文字を最初意識し始めたのである。大人の常識的な考へ方からすれば、子供の最初の文字意識は、凡て讀む興味型であらうミ思ふであらう。しかし事實は書く興味型で文字を最初意識し始める子供も多いのである。私はこの書く興味型の文字意識のあるミをば、自分の子供を育て、見て始めて識つたのであつたが、實に私自身興味を感じたのである。故に私は書く興味型の子供が、自己流の勝手な形を書いて、それを自己流に勝手に讀んでゐるを見ても、決してたはけた子供の戯れ事ミとして輕視しはしなかつたのである。不思議なミには、その勝手に書く字(？)ミいふものゝ形が、色々に書かれるのであるが、形が變れば子供の讀みも變るので、形の違ふものを同じに讀んだりせず、音が違へば形も違つたものを書くのである。即ち一つの形に一つの音を當てゝ讀み、一つの音に一つの形を當てゝ書くのであつて、この點は完全な文字がそれぞれ形を持つてゐて、一つの文字に一つの讀みのあるミいふ、文字の根源的な性格を意識してゐるミが觀取し得るのである。

読み書き同時型 この型の子供は、『読む興味型』と『書く興味型』を併有するもので、書いてある文字の読みを尋ねつつ文意を意識して行くと共に、見た文字を自分で書いて見るこいふ興味をも有つのである。

四 意識型は個性と環境から

かくの如き三つの文字意識型は、然らばどこから生じて来るか云へば、第一にはその子供の個性からであり、第二にはその子供の環境から来るのである。『読む興味型』の子供は、概して『受容型』の性格の子供であり、『書く興味型』の子供は、大體『發表型』の性格の持主である。

而してこの『受容型』——読む興味型の文字意識と、『發表型』——書く興味型の文字意識とは、どちらが良くてどちらが悪いなさう言へる性質のものではなく、随つて子供の文字指導から見ても、どちらか一方の意識型に填め込まうとするのは間違ひなのである。この點については、私共小學校の低學年教育に於ても十分に正しく認識してかゝらねばならないことであるし、幼稚園教育に於ても、強ひて文字を教授することは避けると共に、幼児の自發的自然な文字意識の心理状態を觀取して、私共が家庭で子供を育てるが如くに、漸次にそれらの子供の文字意識を指導することは、今日の文字文化の中に育つ幼兒の教育にまつて、むしろ大事な、必要なことである。私共は考へるのである。

(六月三十日稿)